



朝鮮半島における植民地主義とスポーツに関する研究

金, 誠

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2013-03-06

(Date of Publication)

2013-10-17

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙3215

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003215>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



学位請求論文審査結果報告要旨

博士學位論文

論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏名	金 誠
学位の種類	博士（学術）
学位授与の条件	神戸大学学位規程第5条第2項該当
学位論文の題目	朝鮮半島における植民地主義とスポーツに関する研究
審査委員	主査 教授 木村 幹 教授 土佐 弘之 教授 松 並 潤

論文内容の要旨

本論文は植民地朝鮮におけるスポーツに着目し、日本の植民地主義の影響下においてスポーツという文化的実践が当該社会においてどのような役割・機能を果たし、またその文化的実践がいかなるものであったのかを、いくつかの事例に基づき実証的に明らかにするものである。そこでは、植民地権力や民族主義勢力が、各々スポーツとどのように結びついて来たかを明らかにされ、進んで、植民地期の朝鮮半島の人々にとって、スポーツという「場」がどのような意味合いを持っていたかが分析されている。その具体的な内容は次のようになる。

まず、第1章から第3章では、植民地権力側が形成したスポーツ実践が分析されている。第1章と第2章が着目するのは、植民地期朝鮮における最大の総合スポーツ大会、朝鮮神宮競技大会である。この大会の開催時期は、近代都市としての京城（現在のソウル）が「日本式」の開発を受ける時期に当り、その結果として作り上げられた朝鮮神宮と京城運動場の二つが結合して朝鮮神宮競技大会というスポーツ大会が創設されている。それが範を取ったのは、前年に東京にて行われた明治神宮競技大会であり、朝鮮神宮競技大会も朝鮮神宮にスポーツを奉納する神事の意味合いを与えられる形で1925年より開始されている。この「儀礼化されたスポーツの祭典」の意味づけは、当然、時々の植民地権力側の必要に左右されている。

続いて第3章では、1930年代、皇民化政策期の植民地朝鮮において行われた皇国臣民体操が着目されている。この体操は、総力戦期の朝鮮半島において日本支配への求心力を高める為に、武道・武士道といった日本精神を植え付けていこうとする文化的実践の一部を為しており、皇国臣民の誓詞の暗誦等とともに、皇国臣民の精神を形成していくための「動的体認の実践部分」を受け持っていた。この皇国臣民体操が、先に分析対象とした朝鮮神宮競技大会と異なったのは、前者が後者よりも更に大きな「教育的」目的を与えられていた事にある。その事は1930年代におけるスポーツ実践が、総力戦体制の深化とともに、支配に貢献する為のより能動的な役割が与えられた事を意味している。

続いて、第4章と第5章では、植民地勢力側と対峙した民族主義勢力のスポーツとの関わりが分析されている。ここにおいて注目されているのは普成専門学校（今日の高麗大学校）と東亜日報社を中心とした所謂「東亜日報グループ」の活動である。彼等は、スポーツの発展が民族の発展を示すものであり、また促すものであると考え、これを積極的に推進したことで知られている。

このような「東亜日報グループ」の活動として、第4章ではその教育面を担当した普成専門学校の教育内容が考察されている。周知のように、普成専門学校は植民地朝鮮におけ

論文審査の結果要旨

る数少ない主として朝鮮人の教育の為に設けられた高等教育機関であり、その校長には「東亜日報グループ」の領袖格であった金性洙が自ら就任している。この普成専門学校の特徴はスポーツ教育に力を入れた事であり、その成果は籠球部の全日本大会 3 連覇のような成果として表れている。

スポーツの積極的な活用は、同じ「東亜日報グループ」が経営した東亜日報社の活動についても言う事が出来た。東亜日報社は自ら積極的にスポーツ大会を主催する一方、民族系のスポーツ組織を支援する等の活動も行っている。また、同社の活動の特色の一つには、民族スポーツの再発見と普及への取り組みもある。その背景には、スポーツを通じて民族の近代化を促進する共に、その実践を通じて人々に民族的自覚を持たせようとする、「東亜日報グループ」の人々の思惑があった。

最終章である第 6 章では、夏季五輪に参加した朝鮮人選手に着目し、スポーツの国際化の中で、植民地期朝鮮のスポーツ発展について考察している。重要なのは、当時の朝鮮人スポーツ選手にとって国際舞台に立つ際の最大の障害は、彼等が「日本」の代表選手とならねばならなかったことであり、彼等は朝鮮民族と日本国家の狭間でダブルバインドの状態に陥った事である。

とはいえその事は、当時の朝鮮半島の人々が、国際大会への参加に消極的な価値しか見出さなかった事を意味しなかった。選手らを五輪へと向かわせた一つの背景は、朝鮮人知識人の積極的な支援であった。1930 年代の優生学的な思想の影響も受けた彼等は、国際スポーツの場に朝鮮人選手らが参加することは、自らの民族的優秀性を示すものだと考えていたのである。

このようにして国際舞台へと押し上げられた人物の典型がベルリン五輪のマラソン金メダリスト、孫基禎であった事はよく知られている。このような彼の優勝を、植民地権力側と民族主義勢力側はそれぞれの思惑から利用しようと目論み、この植民地権力と民族主義勢力の葛藤は、植民地権力側によって民族主義勢力が弾圧されていく形で終息する。こうしてベルリン五輪後の孫基禎は「日本の英雄」として表象され、最終的には対日協力にも手を染めていく事となる。

これらの分析の結果として、本論文は、植民地朝鮮で生きる人々がこの時期スポーツを通して試みたものは植民地社会を主導していく者たちのそれぞれが期待する理想の表象であり、それは植民地朝鮮における「支配」・「抵抗」・「協力」の位相のうちに存在していた、と結論付けている。

2002 年のサッカーワールドカップ共催以来、植民地期朝鮮のスポーツの展開に対して一定の関心が向けられるようになってきている。しかしながら、従前の研究には幾つかの問題が存在する。第一は、その視点が限定されている事である。即ち、今日までの大半の研究は、「植民地権力による弾圧の中での発展の歴史」として、植民地期朝鮮のスポーツ史を捉えており、極めて民族主義的性格の強い物となっている。第二の問題点は、その研究の大半が個々のイベントやスポーツの分析に限定されており、植民地期朝鮮のスポーツ発展の全体像に対する考察が乏しい事である。第三に、これまでのスポーツ研究の大半が、スポーツを通じた「身体的実践」という観点を欠いている事である。実際に身体を動かすスポーツという営みの特色が各々の社会にどのような影響を与えるかこそが、スポーツ史を研究する事の意義の一つであり、その意味で従来の研究は重要な欠陥を有している、という事が出来る。

以上のような先行研究の問題点を前提にすれば、本論文の意義も明らかになる。まず、本論文は植民地権力側と民族主義勢力側の二つのアクターを設定し、両者が近代スポーツにどのような役割を期待し、またどのように利用しようとしたかを明らかにしている。重要なのは、本論文がこの二つのアクターを単純に対立する存在とは位置づけていない事であろう。民族主義勢力の側は、植民地権力の側が設定したスポーツ大会等の場を積極的に利用して自らの活動を行っており、植民地期のスポーツの発展は、この両者の「意図せざる協働」を抜きにしては理解不可能だからである。この点について、本論文は新しい視覚を提示する事に成功しており、その点を高く評価する事ができる。

また、本論文において注目されるのは、このような植民地権力と民族主義勢力の「協働」が結果として、個々の朝鮮人選手を深刻なダブルバインディングな状況に追い込み、彼等を時に極端な困難へと直面させる可能性がある事を示している事である。就中、この事は、第 6 章の孫基禎を巡る分析に典型的に表れている。このような植民地権力と民族主義勢力の「協働」は、一体、個々の朝鮮人選手にとってどのように表れたのか。個々のスポーツ選手の視点を交えた分析の価値も極めて大きい。

更に、第 3 章の皇国臣民体操の事例は、植民地権力が具体的な人々の「身体的実践」にどのような意味づけを見出していたかを示すもので極めて重要である。同様の事は、同時期に展開された「ラジオ体操」の普及や、神社参拝についても言える事であり、単なる「紙の上での思想教育」の範囲を超えた「身体的実践」が、この時期の朝鮮半島の人々にどのように表れたかを示す興味深い事例を示している。

とはいえ、このような本論文も幾つかの問題を抱えている。第一の問題は、全体として理

論的基盤が不十分であり、また各章の繋がりも不十分である事である。即ち、本論文は1920年代半ばから植民地支配終焉までの朝鮮半島におけるスポーツを巡る状況を分析しているものの、我々がその全体像をどのように理解すべきかについては、十分に踏み込んで議論していない。個々の「部分」の実証性の高さを考えれば、総論の考察をより丹念に行う事で、本研究はより大きな学問的価値を持ち得るものであり、その点は誠に惜しい、というべきであろう。

第二に、分析の対象についても幾つか欠如している部分がある。通常、朝鮮半島における民族主義運動において欠かす事のできない左翼陣営の動きについては、それがスポーツを軽視していたことから、その欠如をある程度正当化する事ができるものの、より重要なのは当時の朝鮮半島の一般の人々が、植民地期のスポーツ実践についてどのように考えていたかに対する分析が欠如している事であろう。この点については、植民地期を過ごした人々の日記や伝記等で一定の分析が可能であり、今後の研究の発展に期待したい。

更に、植民地支配下における近代スポーツの普及については、他植民地における研究の蓄積が存在し、これらを十分に考慮する必要もあったかも知れない。他植民地における状況と比較する事により、朝鮮半島におけるスポーツを巡る状況の普遍性と特殊性を明らかにする事ができれば、本論文は朝鮮半島におけるスポーツ史研究に対してのみならず、より広くスポーツ史研究全体に対して貢献する事ができたであろう。

とはいえ、以上の事は、現在の植民地期朝鮮のスポーツを巡る研究の状況を考えれば、「望蜀の嘆」というべきであるかも知れない。巻末につけられたインタビュー資料からも明らかのように、本論文は日韓両国に散在する様々な資源を駆使して書かれており、その水準は日本語のみならず、韓国語や英語で書かれた如何なる植民地期朝鮮のスポーツ研究の水準をも凌駕する事となっている。上記の全てはバイオニア的な研究が常に直面する問題であり、筆者が更なる調査研究を積むことにより、一つずつ解決されていくことが期待される。何れにせよ、これらの問題点は、本論文の学問的価値をいささかも損なうものではない、と判断される。

そこで、所定の口述試問と論文評価に基づく上記の理由により、審査委員は、本論文の著者である金誠氏が博士（学術）の学位を授与されるのに十分な資格を有するものと認定する。

平成25年2月4日

審査委員	教授	木村	幹
	教授	土佐	弘之
	教授	松並	潤